文化財保護課

群馬県前橋市

# 大友屋敷II遺跡

店舗建設に伴う発掘調査報告書

1987

前橋市教育委員会
前橋市埋蔵文化財発掘調査団

# 序

前橋市は、より健全な市街地の開発と住みよい街づくりの為の都市基盤の整備が各地で進められ、当地区は前橋都市計画事業元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業が実施されています。このような市民の快適な暮しを願う区画整理事業と埋蔵文化財保護の問題は常にうらはらの関係にあり、前橋市教育委員会では、両者の調整に鋭意努めているところであります。

この調査は、前述の区画整理区域の店舗建設に伴って発掘調査を実施したものであります。

大友屋敷II遺跡は、国府推定地東側外郭線に隣接すると考えられる重要な遺跡であります。この地から遠く周囲を見渡しますと、北に子持山、北東に赤城山、北西に榛名山の諸山が並立し、東に利根川、南は広大な関東平野へと続いており、この地こそまさに山紫水明、四神相応の地として古代人が国府の適地と選んだのもうなずける気がします。調査の結果奈良時代から平安時代に至る遺物及び遺構が確認されました。遺物は、土師器及び須恵器等が検出されました。遺構は、浅間山火山灰（B軽石）降下以降の溝と地下式土壙及び井戸跡等が確認された。

この調査を実施するに当たり有限会社船寿し（代表取締役伸沢平治氏）のご理解とご協力に厚く感謝申し上げます。

本調査報告書がこの地域の歴史解明の資料として、少しでも利用されるところがあれば幸甚であります。

昭和62年9月9日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団長　関口和雄

# 例　言

1．本書は有限会社　船寿しの店舗建設に伴い前橋市宅地開発指導要項の定めに従い開発予定地の事前調査の報告書である。

2．発掘調査は前橋市教育委員会のもとに組織された、前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長　関口和雄）の委託を受け、スナガ環境測設株式会社（前橋市青柳町211―1　代表取締役須永眞弘）が実施した。

3．調査担当者　浜田博一（前橋市教育委員会管理部文化財保護室係長）
　　遠藤和夫（　　同　　上　　主任）
　　新保一美（　　同　　上　　嘱託）
　　金子正人（スナガ環境測設株式会社埋蔵文化財調査部長）
　　白石光男（　　同　　上　　第二グループチーフ）

4．遺跡名、所在地、調査期間及び調査面積は下記の通りである。
　遺 跡 名　　大友屋敷II遺跡　略称　62A―26
　所 在 地　　前橋市元総社町12街区3691―1
　調査期間　発掘調査　昭和62年6月25日～7月18日まで実施した。
　　遺物整理　昭和62年7月19日～8月31日
　調査面積　450㎡

5．本調査における出土遺物は、前橋市教育委員会のもとに保管されている。

6．本書はスナガ環境測設㈱埋蔵文化財調査部が作成に当たり、編集総括を金子正人が当たり、白石光男が執筆した。佐々木智恵子、角田朱美が遺物の実測とトレースをし、遺構のトレースは荻野博巳が担当し、作業事務は柴崎信江が行った。

7．測量作業の指導は須永眞弘（測量士第52614号）が行い、発掘調査の安全管理に荻野博巳が当った。

8．本調査に際して、多大なご協力を戴きました有限会社船寿し代表取締役伸沢平治氏に厚く御礼申し上げます。

9．調査及び整理に当たり下記の方々に御指導、御助言を賜った。記して感謝の意を表す次第であります。（敬称略）
　　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
　　境町教育委員会

10．調査に参加した方々は次の通りであります。記して感謝致します。（順不同）

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 今井芳生 | 板垣　宏 | 真下光男 | 須永嘉明 | 松岡和香江 |
| 河西三明 | 近藤充朗 | 小林康典 | 石川サワ子 | 小川富八 |

# 凡　例

1．各遺構の略号は下記の通りである。

W－溝　　D－土壙　　P－ピット　　I－井戸跡

2．遺構、遺物の実測図の縮尺は下記の通りである。

全体図1/100　平面図(溝1/80・地下式土壙、井戸跡、ピット状遺構1/40)　土層断面図1/40

遺物実測図1/3

3．現況図は「前橋現形図42」S＝1：2500を使用した。

4．遺構平面図で使用している北は座標北を基準とする。

5．土層断面の土色名及び土器類の色調名は「新版基準土色帳」による。

6．挿図中のスクリーントーンの表示は下記の通りである。

……地山　　……B軽石層

……内黒土器　　……灰釉陶器

# 目　次


序

例　言

凡　例

第1章　調査に至る経緯 …… 1

第2章　遺跡の環境　1．立地と環境 …… 2

2．歴史的環境 …… 2

第3章　調査方法と経過　1．調査方法 …… 4

2．経　過 …… 5

第4章　遺跡の層序 …… 5

第5章　遺構と出土遺物　1．溝 …… 6

2．地下式土壙 …… 15

3．井戸跡 …… 16

4．ピット状遺構 …… 17

5．その他 …… 19

第6章　まとめ …… 21

写真図版

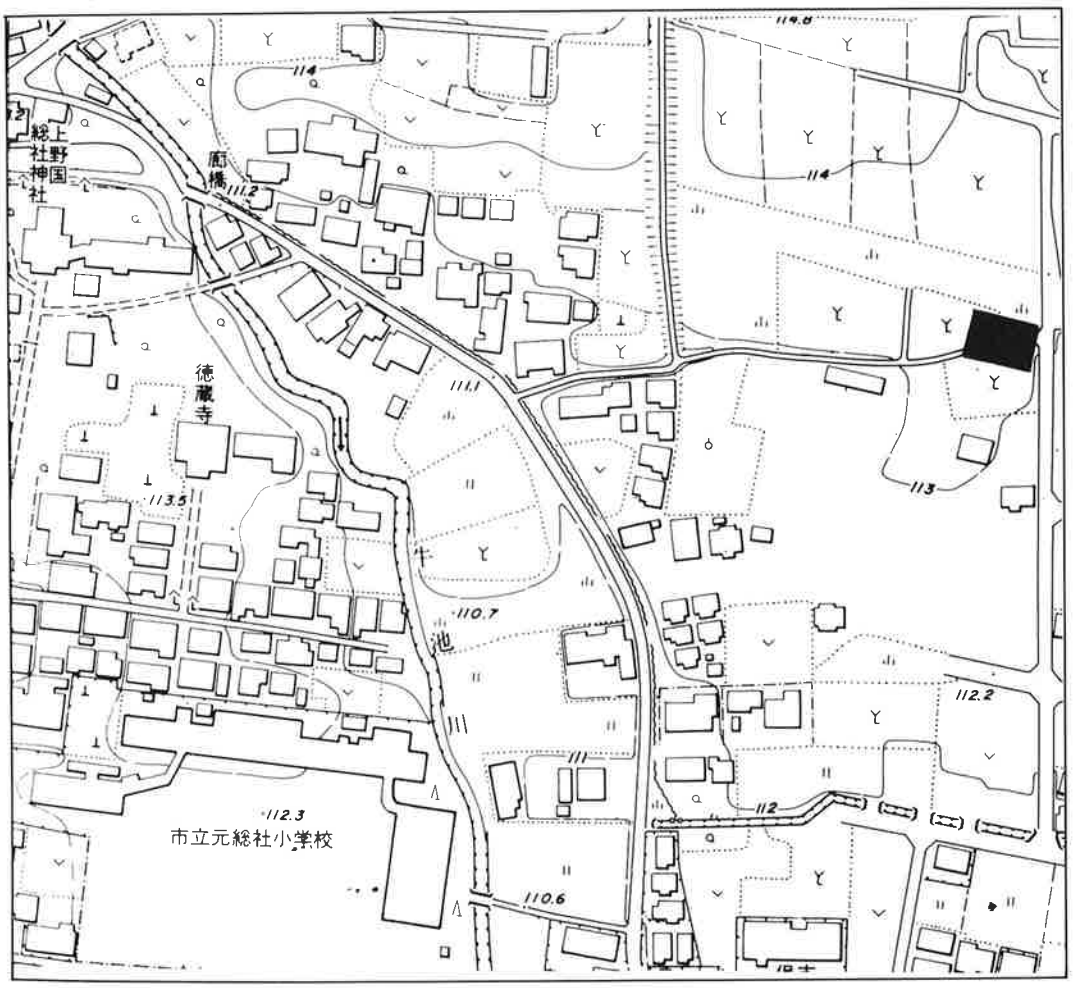
付図1．遺跡全体図

付図2．遺跡地層断面図

# 第１章　調査に至る経緯

前橋都市計画事業元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業の実施に伴い、昭和57年以来、本地域では埋蔵文化財発掘調査を実施してきている。本発掘調査は前橋市宅地開発指導要項に基づき事業者有限会社船寿し代表取締役伸沢平治氏の店舗建設工事に先がけて実施されたものである。

本遺跡は、前橋市元総社町12街区3691―1に位置し、周辺には、上野国府推定地域を始め東山道（推定）国分僧寺、国分尼寺跡等が存在し、古代群馬の文化的中心地を形成していた地域である。このような地域であることから、調査委託者伸沢平治氏は埋蔵文化財に対して大変造詣が深く理解を示して戴いた。昭和62年５月20日付けで調査依頼を受け、前橋市教育委員会（教育長　岡本信正）文化財保護室が試掘調査を行った。その結果、溝・柱穴・住居址等が確認されたため、事業者と市教育委員会と協議調整の上発掘調査する運びとなった。

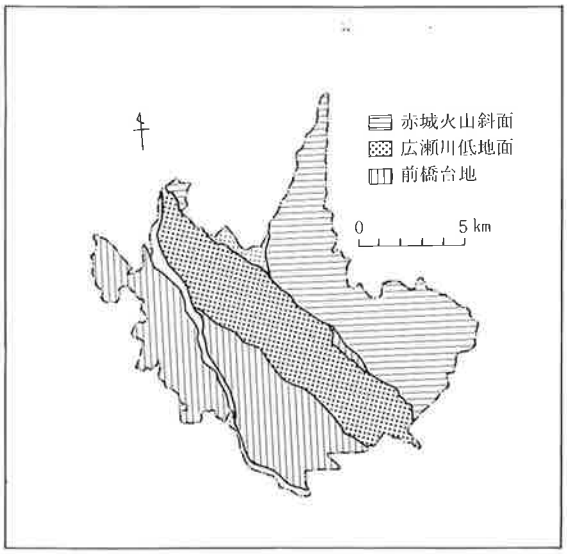


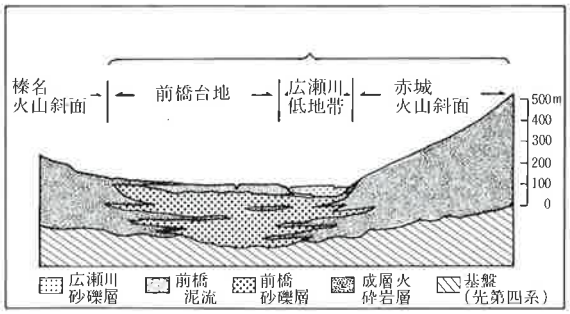

第１図　現　況　図

# 第２章　遺跡の環境

## １．立地と環境

前橋市は、関東平野が南に形成されようとするその始まりのところに位置し、北は赤城山、西は榛名山を擁す。奥利根に源を発し、平野部を南流する利根川とその支流である広瀬川・桃木川が市内を東南に流下し、この両川は、古利根川水系の名残である。これらの河川により地形や地質を３地域に区分することが出来る。北東部桃木川から赤城山南面にかけての赤城火山斜面地帯と過去に利根川が流路を変え砂礫層となっている桃木川から広瀬川にかけての約2.5～３km幅の河床地帯である広瀬川低地帯(沖積低地)。そして、２万４千年前の前橋泥流の堆積により形成された広瀬川から現利根川を含み、榛名火山斜面までの前橋台地(洪積台地）である。大友屋敷II遺跡はこの前橋台地上にあり、前橋市元総社町12街区3691―1番地に所在する。遺跡より東側約300m付近に市道大友西通線（通称産業道路）が南北に走り、西約400mには上野国総社神社がある。現地域は区画整理により盛土されており、自然地形ははっきりしない。旧地形図によると榛名山系の河川、八幡、牛池、染谷川等により開析された低地と微高地とから成っており、牛池川の東約300mに立地している。



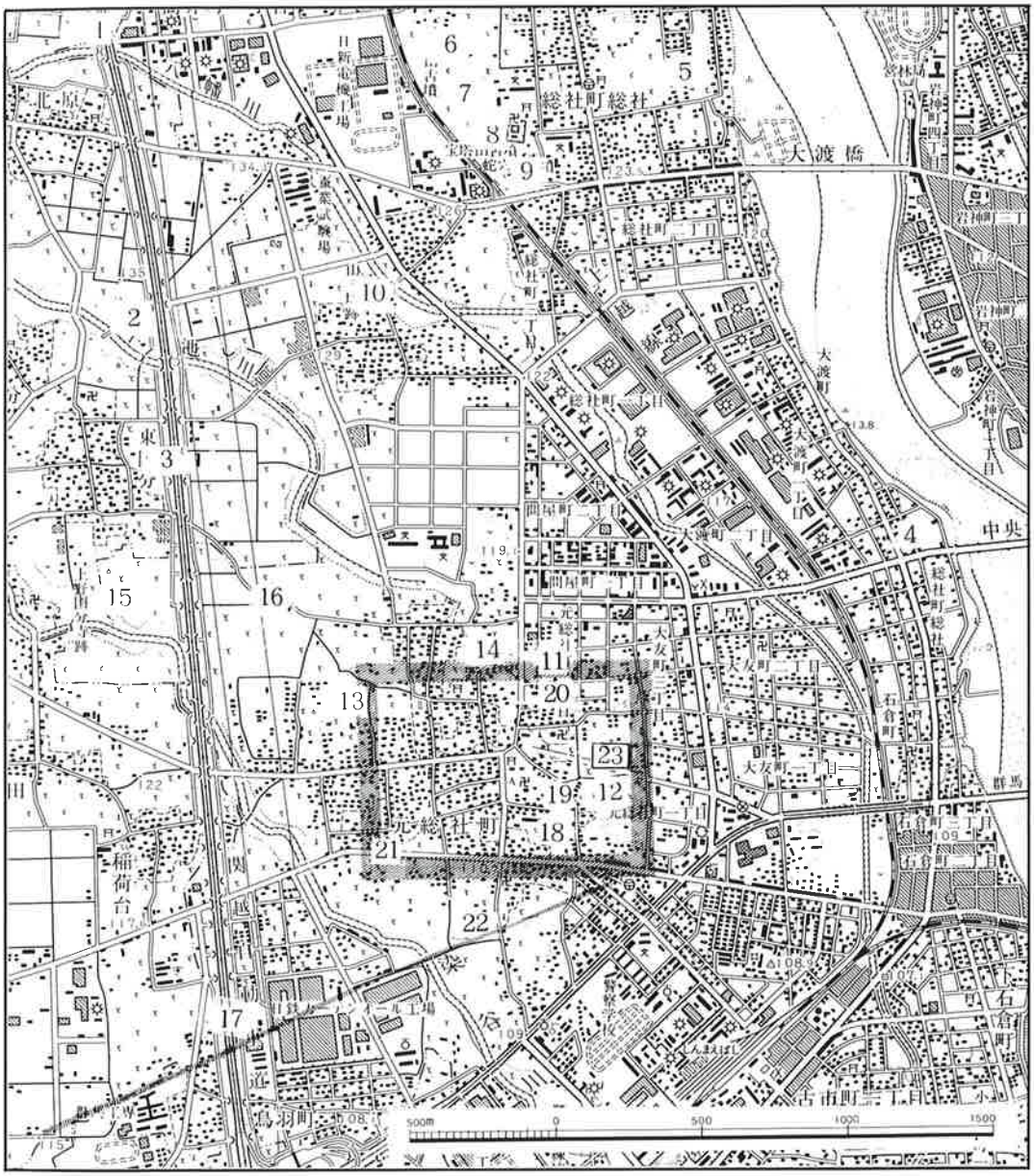




第２図　前橋地形・地質図（前橋市史第１巻より）

## ２．歴史的環境

（註）文中の番号は地図中の番号と一致する。

本遺跡が所在する前橋市元総社町は、古代上野国の中心的地域であり、その周辺には古代上野国を知る上で極めて重要な遺跡が多く存在する。縄文・弥生時代においては、清里、総社地域に発掘例を見ることが出来る。①下東西遺跡では縄文後期の遺物や弥生後期の住居跡等が知られ、③国分寺中間地域遺跡に至っては、縄文時代前・中期の住居跡約20軒、また弥生時代の遺構である方形周溝墓等が発掘されている。古墳時代の６世紀初頭から終末期にかけて、古墳が築造されており、６世紀初頭川原石で構築された積石塚、全長72mの前方後円墳④王山古墳




第３図　周辺の遺跡

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 下東西遺跡 | 2 | 国分境遺跡 | 3 | 国分寺中間地域遺跡 | 4 | 王山古墳 |
| 5 | 遠見山古墳 | 6 | 総社二子山古墳 | 7 | 愛宕山古墳 | 8 | 宝塔山古墳 |
| 9 | 蛇穴山古墳 | 10 | 山王廃寺跡 | 11 | 閑泉樋遺跡 | 12 | 元総社明神遺跡 |
| 13 | 草作遺跡 | 14 | 上野国府域(推定) | 15 | 上野国分僧寺 | 16 | 上野国分尼寺 |
| 17 | 鳥羽遺跡 | 18 | 元総社小学校校庭遺跡 | 19 | 寺田遺跡 | 20 | 閑泉樋南遺跡 |
| 21 | 天神遺跡 | 22 | 東山道（推定） | 23 | 大友屋敷Ⅱ遺跡 | | |

や、全長70m程の同じく前方後円墳の⑤遠見山古墳が存在した。6世紀末から7世紀初頭にかけては前方部にも石室を有し、前方部と後円部の築造年代がことなる。⑥総社二子山古墳（前方後円墳）や⑦巨石使用の横穴式石室を有する愛宕山古墳（方墳）等がある。7世紀末から8世紀初頭にかけては石室が截石切組積で、格狭間が刻り込まれた家形石棺を有する⑧宝塔山古墳（方墳）や、古代上毛野国の最後を飾る⑨蛇穴山古墳（方墳）などがある。そしてこれらの石造技法は約800m西にある⑩山王廃寺跡の塔心礎などの石材加工技術に影響を与えていると言われている。奈良・平安時代に至っては、古代上野国の政治、文化の中心地としての様相を帯びてくる。特に上野国府については「倭名類聚鈔」にその初見が記述されているが詳細な所在までは記載されていない。そのため、その所在を探ろうと「上野国神名帳」等の研究により⑭上野国府の推定地が想定された。またこの研究を基に、上野国府に関する諸研究がなされている。本調査地の周辺には、国府と関連のある遺跡が数多く発掘調査されており、⑪閑泉樋遺跡や⑳閑泉樋南遺跡⑲寺田遺跡等では幅約7m程の大溝が確認されており、⑱元総社小学校校庭遺跡では官衛の一部と推定されている柱穴跡も見つかっている。集落址においても⑫元総社明神遺跡（25軒）㉑天神遺跡（32軒）⑬草作遺跡（7軒）等などが調査されており、国府と集落址を考える上で興味深い。そしてこの南には官道である㉒東山道（推定）が通っているほか、北西約1km付近には⑮上野国分僧寺⑯国分尼寺跡等が所在している。以上のことから㉓大友屋敷II遺跡は古代上野国を考察する上で大変重要な場所に位置すると思われる。

# 第3章　調査方法と経過

## 1．調査方法

昭和62年5月25日前橋市教育委員会によって、大友屋敷II遺跡の試掘調査が行われた。東西南北にトレンチ（筋掘り）を幅1mで3条設定し、行われた試掘面積は52m²である。その結果、溝、住居址、柱穴、土師器、須恵器片等の遺構、遺物が確認された為、試掘調査に基づいて本調査を行うことになった。本調査面積は450m²で昭和62年6月25日より7月18日まで発掘調査を行った。プラン確認は表土層より約0.9〜1.3mの間で行い確認後調査域を北西隅より、経線は西より0、1、2、……8まで、緯線は北よりA．B．C……Hまで各々4m幅でグリット設定した。測量基準点は標高を112.50m、座標をX＝＋42970.00m、Y＝−70720.00mとX＝＋42970.00m、Y＝−70750.00mに設定した。全体の土層観察は北壁と東壁セクションにて確認し、溝は完掘はせずベルトを残し、方向、幅、深さ等が調査確認できるにとどめた。また、ベルトにて土層観察を行った。地下式土壙、ピット等では半裁し、土層観察し完掘を行った。遺物については覆土中の物は、グリットごとに、溝の中の物は溝ごとに一括で取り上げたが、遺構に関係あるもの、完形品や重要であると判断した物は、図面に記録した。写真撮影は、遺構、全体、気球による空中写真等で行い、使用フィルムは白黒、リバーサルで撮影記録した。

## 2．経　　過

本調査期間は昭和62年６月25日㈭～７月18日㈯実働日数21日間で行われた。

以下日誌より抜粋

６月25日～26日　調査区域の杭打ち、休憩所設置、機材等の搬入を行う。

６月27日～30日　表土排除作業開始Ｂ軽石層面及びローム面迄掘り下げる。
ジョレン掻き後遺構・土層確認、溝３条確認。

７月１日～３日　溝、４条（Ｗ１、２、３、４）が確認される。各遺構に番号・記号を付けるため、遺構略図作成する。

７月４日～７日　土層観察をし注記を始める。井戸、地下式土壙を確認、溝１条（Ｗ５）確認する。

７月８日～10日　６号溝（Ｗ６）を確認、各の溝はトレンチにて調査する。井戸を掘り上げる。Ｗ２－Ｗ３を連結する溝を確認。

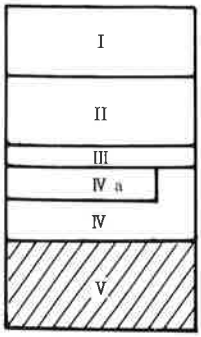
７月11日～13日　北壁で旧道を確認。地下式土壙を完掘する。溝・壁のセクション取りと写真撮影。

７月14日～16日　調査区の1/100全体図、1/20の遺構平面測量とレベリングを行う。気球を使って空中撮影を行う。

７月17日～18日　1/100全体図に５cm等高線を落とす。図面・写真・機材等の撤収作業、大友屋敷Ⅱ遺跡発掘調査を終了する。

# 第４章　遺跡の層序

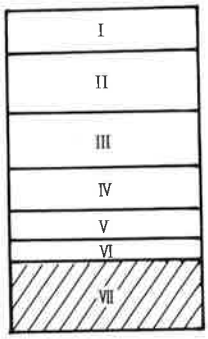
本遺跡の地形は、北東方向にかけて緩やかに落ち込んでおり、土層は主に６層に大別することができた。Ｂ軽石の堆積状況は、西壁の一部で純層として捉えることが出来たが、北壁部にかけて耕作土と混じり、層としては捉えられなかった。しかし、ブロック状には残存しており、層として堆積していた時期があったようである。東壁部ではＢ軽石層は認められず、ほとんど耕作土中に混じっており層としての確認は出来なかった。また、Ｃ軽石粒を含む、粘土質の黒色土層が堆積しており、西壁、北壁部とは層位の違いがみられる。




第４図　基本土層

東　壁

| | | |
|---|---|---|
| Ⅰ | 表土 | 盛土 |
| Ⅱ | 明褐色土層 | 西、北壁、Ⅱ層と同じ |
| Ⅲ | 明褐色土層 | 西、北壁、Ⅲ層と同じ |
| Ⅳa | 黒褐色土層 | 粘性があり、Ｃ軽石粒子を含む。比較的締まっている。 |
| Ⅳ | 黒色土層 | 粘土質で土質密であり、所々にＣ軽石とロームブロックが混入されている。 |
| Ⅴ | ローム地山 | |




西・北壁

| | | |
|---|---|---|
| I | 表土 | 盛土 |
| II | 明褐色土層 | 粘性はなく、土層は柔らかい。層中に空気が多く耕作土と思われる。 |
| III | 明褐色土層 | 粘性は少なく、土層中にもB軽石の混入が認められるが多くない。ザラツキ、締りは良い。 |
| IV | B軽石層 | B軽石の純層で厚い所では10～15cmを測る。 |
| V | 灰褐色土層 | B軽石が混入していたため、ザラツキがあるが粘性もある。1～2㎜程の粒子を含む、鉄分の付着がみられる。 |
| VI | ローム層 | 砂礫質のソフトローム層。5～6cmの礫を含む。粘性に欠けもろい。 |
| VII | ローム地山 | |

第5図　基本土層

# 第5章　遺構と出土遺物

## 1．溝（W－1～6）

本遺跡では、表土より約0.9～1.3m程掘り下げたところで、幅4～5mの溝2条と幅約1～2m程の溝4条、また溝同士を連結する溝も調査確認できた。計6条である。溝は確認された順に番号をつけ1～6号までを数える。以下詳細を記す。

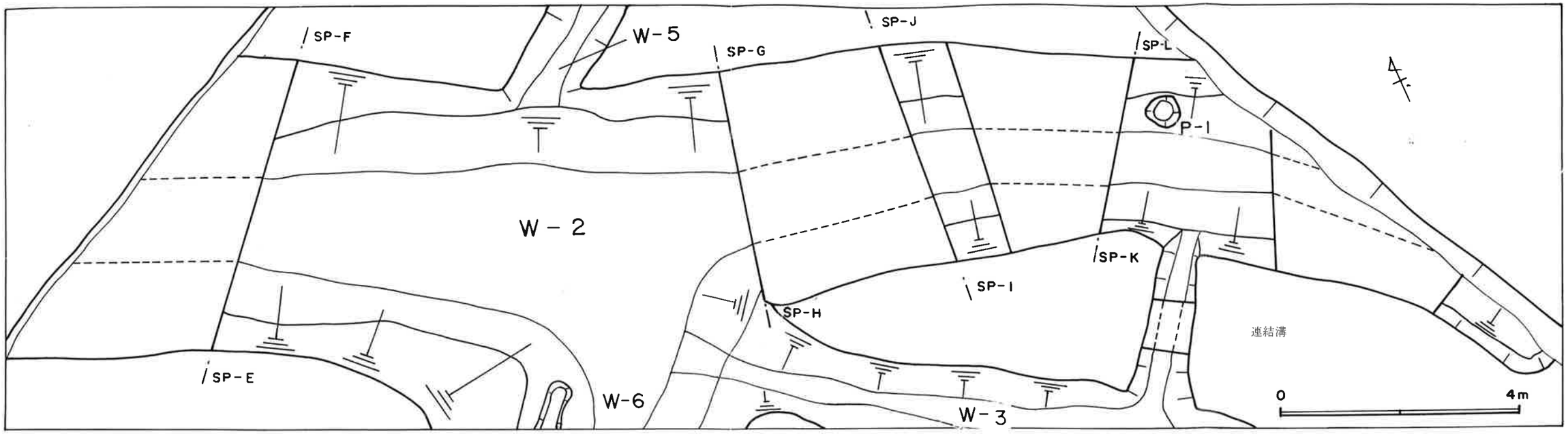
（註）溝の長さは、調査区内での長さを示す。

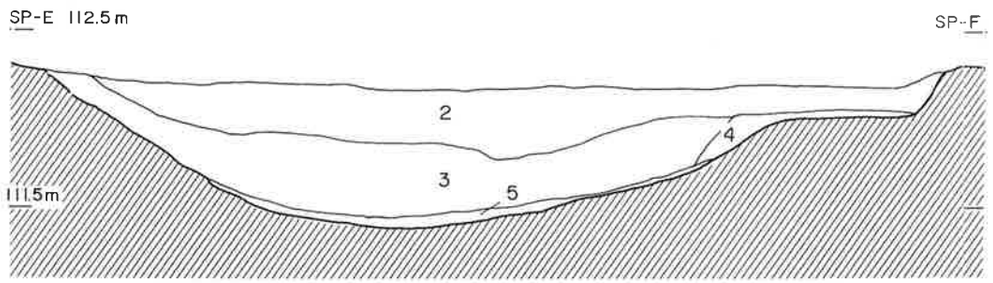
### a　1号溝（W－1）

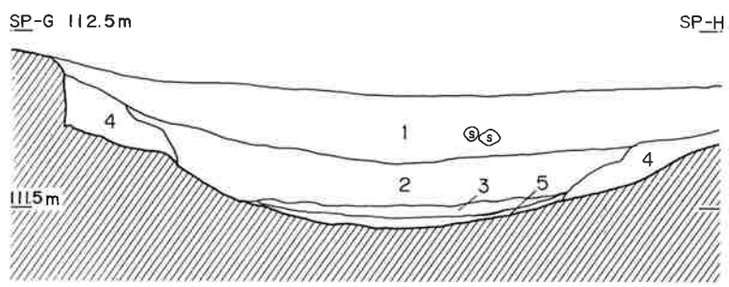
1号溝は調査区の北西隅に位置し途中約4m付近で5号溝を切り西南から東北にかけて走る溝である。幅約55～60cm、深さ約4～8cmを測る。長さ約11.5mを測るが、東北隅に行くに従い、溝としての立ち上がりが消え確認できなくなる。また同方向に数状の溝の交差が認められたが、残存状態が悪くその規模までの計測には至れなかった。1号溝付近には、浅間B軽石の純層が確認でき厚い所で10～15cm程を測るが、調査区東へ向かうに従い、浅間B軽石層はほとんど確認出来なくなり、耕作土中に混入されて行くものと思われる。出土遺物は2～3cmの土師器片、須恵器片67点数えるがほとんど磨滅した状態であるため、器形の識別は困難であった。溝底の高低差は、ほとんどなく平坦であるが自然地形が東北方向に傾斜しているため、溝底も西南から東北にかけて傾斜していると思われる。（全体図参照）

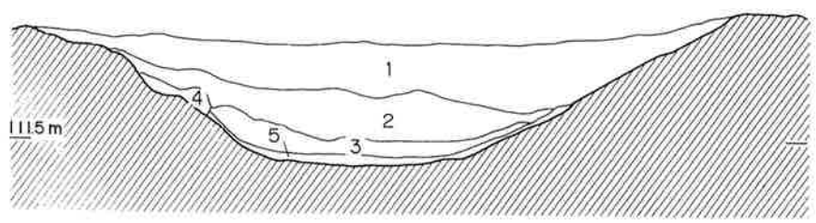
### b　2号溝（W－2）

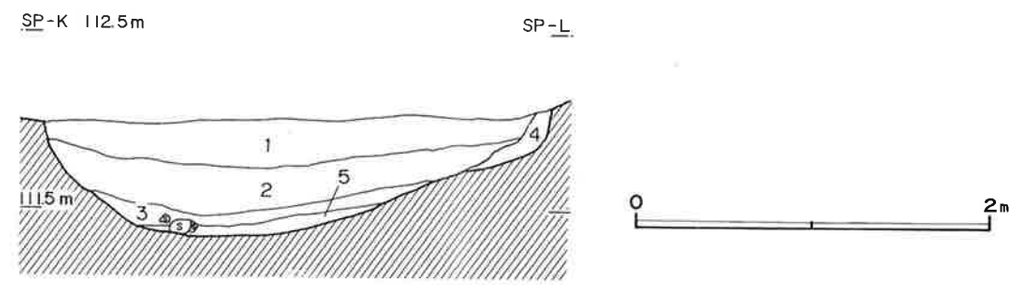
2号溝は、本遺跡の中で一番規模が大きい溝であり、調査区内を南西から北東に走り長さ約20mを測る。E－F付近では溝と上幅は4.5～5.0m、下幅1.5m、深さ0.78mを測り、2号溝中最大の溝幅を呈する。G－Hでは、上幅4.0～4.25m、下幅1.3m、深さ0.76mで3号溝と接する所であり、この付近から溝が狭くなり始めている。I－Jは上幅3.8～4.0m、下幅1.1m,深さ0.




第6図
2号溝平面図
土層断面図

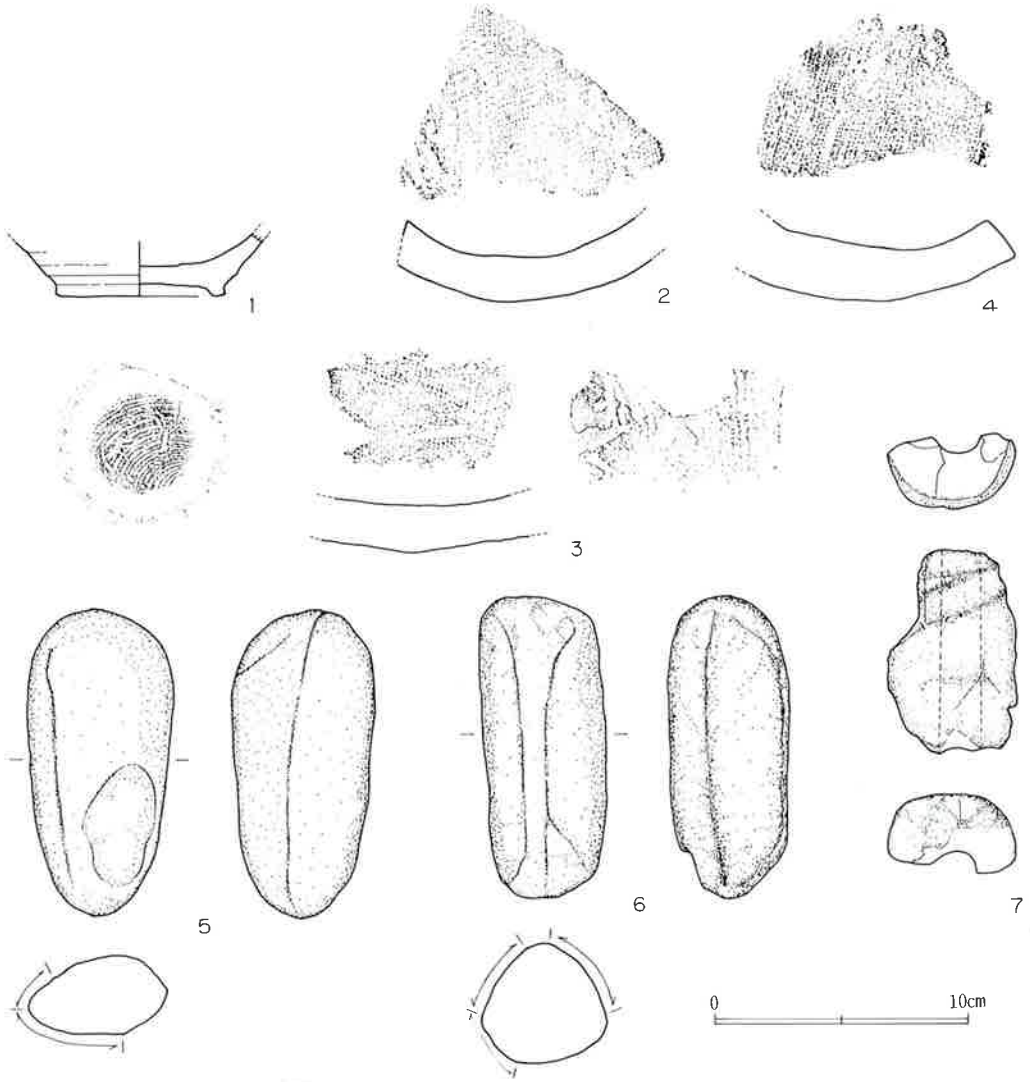
1　褐色土層　比較的柔らかく、粘性は少ない、土層中に空気層があるが土質の締りは比較的よい、少しザラつきぎみである。
2　暗褐色土層　土層は締まっている。下に行くほど粘性があり3層の漸移層のようだ。
3　暗褐色土層　粘性に富み混入物はみられない。胎土はしっかりしており密である。
4　褐色土層　ロームのブロックが混入しており、あまり粘性もなく土層の締りは普通である。黄色味を帯びている。
5　灰褐色土層　3層より粘性があり、粒子は細かく指に粘りついてくる。

## 第1表　2号溝出土遺物観察表

法址(　)は推定値

| 番号 | 出土位置 | 種類 | 法址(cm) 口径 | 底径 | 器高 | 胎土・焼成 | 色調 | 器形の特徴 | (外面)整形 | (内面)整形 | 遺存備考 | 図版No |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | W-2 | 台付埦須恵器 | | 6.8 | | 1～2㎜程の小石含む粉状に落ちる　酸化 | 淡黄橙色 | 貼付け高台いびつ | 底部右回転糸切り痕ヘラ削り調整 | 回転ナデ調整 | 底部残 | 4 |
| 2 | W-2 | 平瓦 | | | | 黒色鉱物粒を含む還元 | 灰白色 | 肉厚1.6cmを測る1枚作り(推定) | 縄叩き後ナデ消ししている | 布目 | | 4 |
| 3 | W-2 | 平瓦 | | | | 黒色鉱物粒を含む還元 | 灰色 | 肉厚1.6cmを測る1枚作り(推定) | 縄叩き後ナデ消ししている | 布目 | | 4 |
| 4 | W-2 | 平瓦 | | | | 白色鉱物粒を含む還元 | 暗青灰色 | 肉厚2.4cm(中央) 1.6cm(端)　1枚作り | 素文 | 布目 | | 4 |
| 5 | W-2 | 石器 | | | | 緑泥片岩 | | 両面に使用痕あり | | | | 4 |
| 6 | W-2 | 石器 | | | | 安山岩 | | 三面に使用痕あり | | | | 4 |
| 7 | W-2 P-1付近 | 羽口 | (5) | | | 黒色鉱物粒を含む還元 | 灰白色 | | 指の腹による整形 | | | 4 |

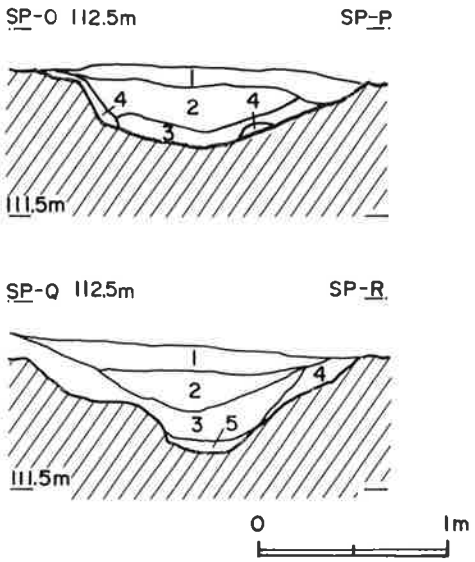
71mを測る。溝の断面形は、緩やかなU字形を呈し立ち上がりはE－F、G－Hで10°前後、I－Jで25°前後で立ち上がる。また、約50～90cm幅の中段を有すが凸凹が激しく明確さを欠く。K－Lは上幅2.8～2.9m、下幅0.8m、深さ0.67mでこの位置付近から流路は東よりに方向を変えているようだが、その先は調査区域外であるため、今後の調査に期待したい。溝の断面形は椀状形を呈すが南側は35°位の急な立ち上がりを示し、北側は10°前後の緩やかな立ち上がりを示す。溝底は砂礫質で固く締まっており平坦で高低差はないが自然地形からみて北東方向に傾斜していると思われる。その他、北東隅には直径約60cmを測るピット状遺構や3号溝と繋がる連結溝等が確認された。出土遺物は、土師器片、須恵器片223点、灰釉陶器片若干、磨石、布目瓦が出土したが、完形品はほとんどなく、確認面以前の覆土中の物が多く流れ込みの感が強い。ピット状遺構の付近から羽口片や石臼の一部も出土した。

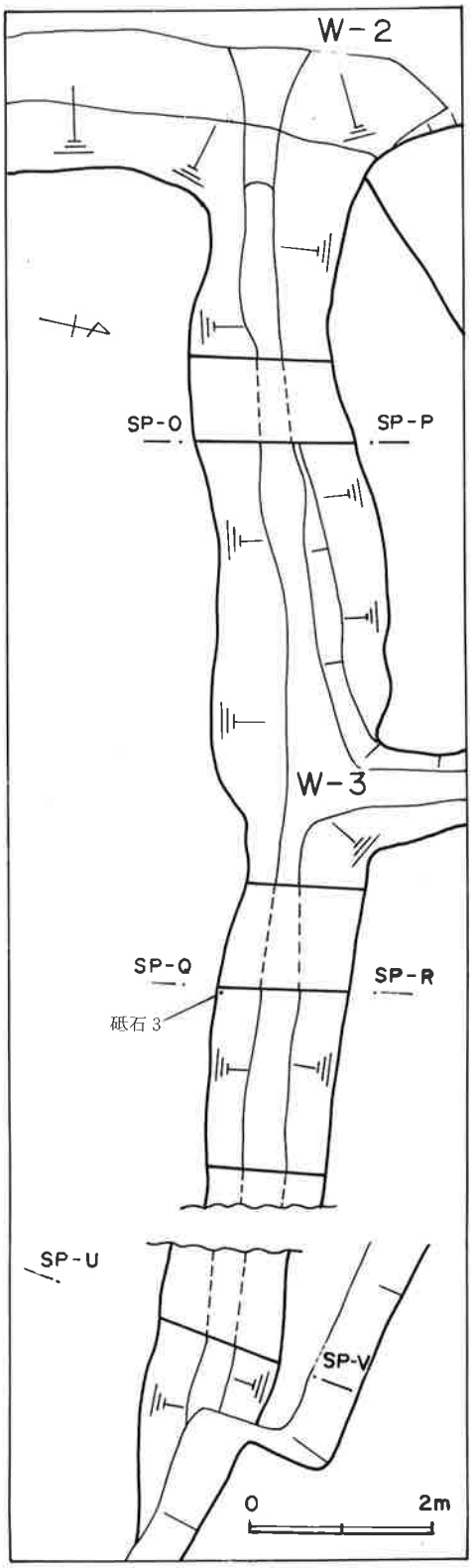



第7図　2号溝出土遺物

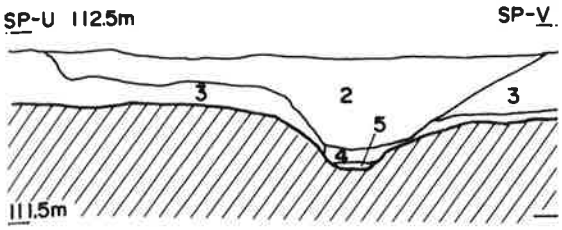
c　3 号 溝（W—3）

3号溝は、2号、6号溝合流地点中段付近に開口し東に走り途中7m付近で、2号溝と連結する溝を備えている。長さ約16mを測る。O－P付近での溝上幅は1.7m、下幅0.5m、深さ0.45mで、立ち上がりは10°前後で緩やかに立ち上がり、断面形はU字形を呈す。Q－Rでは上幅1.8m、下幅0.4m、深さ0.55mで、立ち上がりは40°前後で直線的に立ち上がり、断面形は、逆台形状を呈すが南側は段状のものを有す。U－Vは上幅1m、下幅0.2m、深さ0.3mで、断面形状は、きれいな逆台形を呈し立ち上がりは40°前後で直線的に立ち上がるが上端で丸見を持つ。溝底は、西から東にかけて緩やかに傾斜しており、土質は粘性があり浸透性はない。出土遺物は、土師器片、須恵器片、布目瓦片81点を数えたが、遺構に伴うものはほとんどなく覆土中からの物が多い。実測可能なものは1点しかなかった。その他砥石、凹石片が出土した。砥石は溝淵から出土しており、遺構に伴う唯一のものであった。

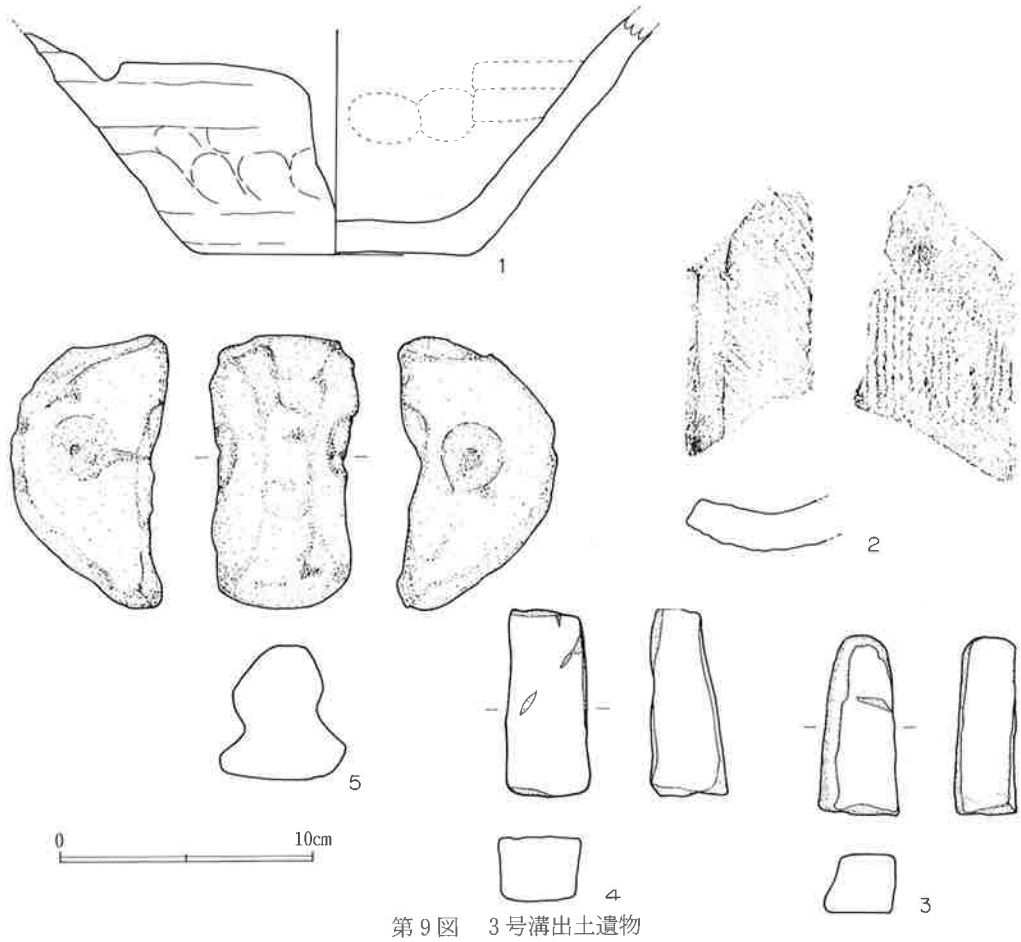



第8図　3号溝平面図・土層断面図




1　褐色土層　粘性は少ない、土質は締まっている。
2　暗褐色土層　粘性はあり土質は締まっている。
3　褐色土層　粘土質で土質は密である。
4　褐色土層　ロームブロックの混入が見られ粘性は少ない。
5　灰褐色土層　粘土質で粒子は細かい。




第9図　3号溝出土遺物

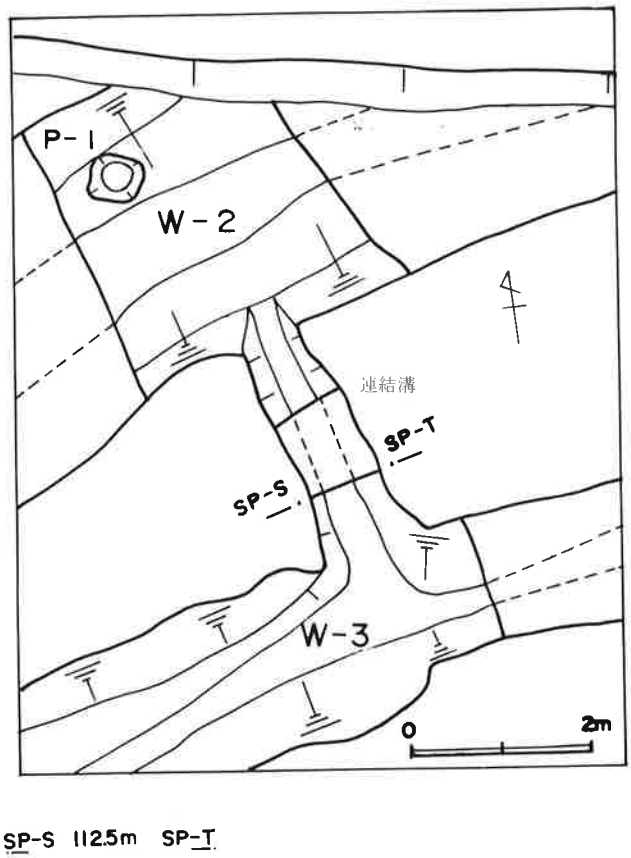
第2表　3号溝出土遺物観察表

法量(　)は推定値

| 番号 | 出土位置 | 種類 | 法量(cm) 口径 | 底径 | 器高 | 胎土・焼成 | 色調 | 器形の特徴 | (外面)整形 | (内面)整形 | 遺存備考 | 図版No. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | W-3 | 壺 須恵器 | | (12.0) | | 1～2㎜小石含む 酸化 | 明褐灰色 | 底部から直線的に外反する | ナデ調整後底部指による整形 | ナデ調整 | | 4 |
| 2 | W-3 | 平瓦 | | | | 黒色鉱物粒を含む 酸化 | 褐色 | 肉厚1.6cmを測る 一枚作り | 縄叩 | 布目 | | 4 |
| 3 | D-5G W-3溝測 | 砥石 | | | | 粘板岩 | | 4面を使用 | | | | 5 |
| 4 | W-3 | 砥石 | | | | 粘板岩 | | 3面を使用 | | | | 5 |
| 5 | W-5 | 凹石 | | | | 角閃石安山岩 | | 凹面加工されている | | | | |

d　連結溝（W２－W３）

２号溝、３号溝合流点より、東に約７mの所に位置し両溝を結んでいる。長さ３m測る。溝は２号溝側で上幅0.5m、下幅0.3m、深さ0.45m、３号溝側で上幅1.2m、下幅0.5m深さ0.6mを測り、２号溝側が狭くなっている。断面形は、逆台形状を呈し、立ち上がりは50°でほぼ直線的に立ち上がり、しっかりした作りできれいな形状である。溝底は砂礫質で若干粘性を有し固く締まり、２号溝中段に開口している。高低差は、３号溝側に傾斜しているが、３号溝全体のレベルや溝の形状から、２号溝にも水の流れはあったと思われる。遺物は、ほとんど出土していない。



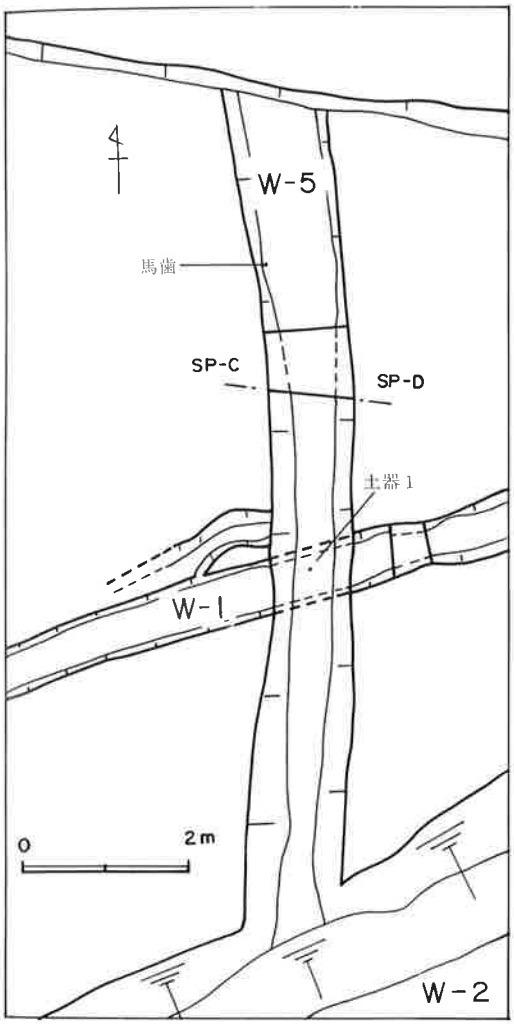

第10図　W２・W３連結溝平面図・土層断面図

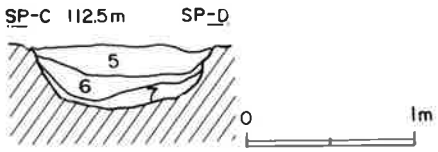
e　４号溝（W－４）

調査区域東端に位置し、長さ約５m程で西から東に走り、西側に行くにしたがい、消滅していく。ほとんど立ち上がりは認められない。溝幅が辛うじて確認できる程度で、溝幅は約75cmを測る。遺物はほとんど出土していない。（全体図参照）

f　５号溝（W－５）

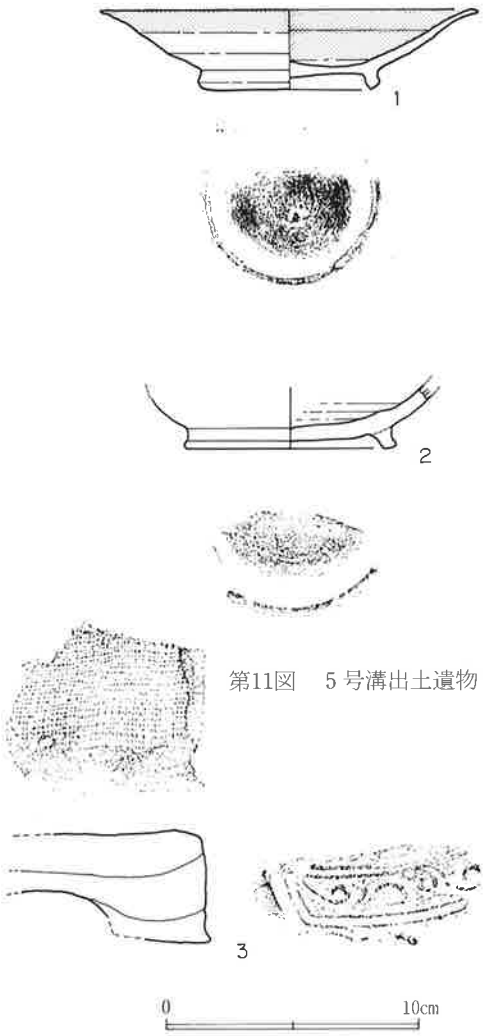
５号溝は調査区域、西に位置し北から南に走り、１号溝と交差し２号溝まで至っている。長さ約10mを測り、溝上幅１～1.1m、下幅0.6m、深さ0.4mで断面形は、椀状形を呈し、湾曲しながら立ち上がる。溝底は砂礫質で固く締まっており、北から南にかけて、傾斜している。出土遺物では、土師器片、須恵器片、灰釉陶器片、263点を数えるが覆土中からのものが多い。灰釉皿は５号溝の底から出土し唯一遺構に伴うものである。その他、馬歯も溝に伴って出土した。




5　褐色土層　　北壁の5層注記と同じ。
6　灰褐色土層　北壁の6層注記と同じ。
7　黒褐色土層　北壁の7層注記と同じ。

第12図　5号溝平面図・土層断面図




第11図　5号溝出土遺物

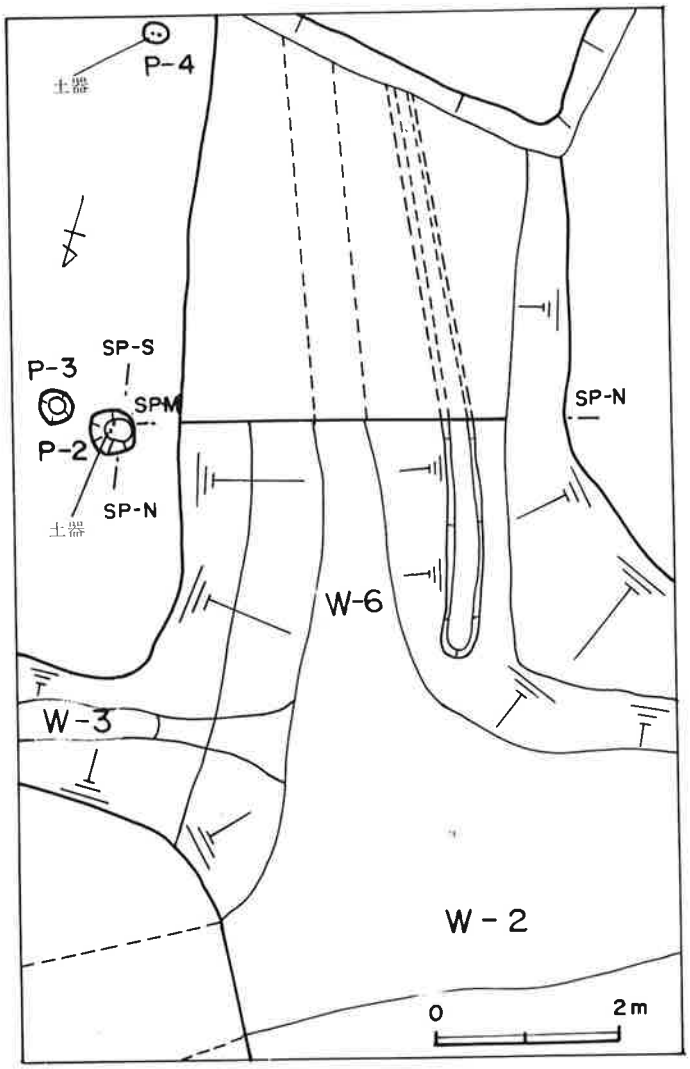
第3表　5号溝出土遺物観察表

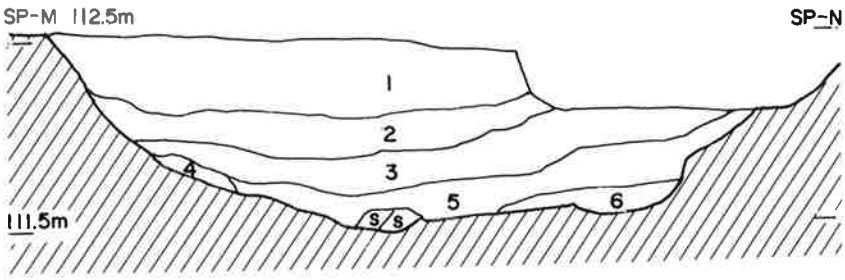
法量(　)は推定値

| 番号 | 出土位置 | 種類 | 法量(cm) 口径 | 底径 | 器高 | 胎土・焼成 | 色調 | 器形の特徴 | (外面)整形 | (内面)整形 | 遺存備考 | 図版No |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | W-5-1 | 皿 灰釉 | (15.0) | 7.5 | 3.2 | よく締まっている　還元 | 灰白色 | 高台部から直線的に外反する | 底部体部口縁部等回転ナデ調整 | 口縁部に灰釉 回転ナデ調整 | ½残 | 5 |
| 2 | W-5 | 杯 須恵器 | | (8.8) | | 砂粒を含み粉状に落ちる　還元 | 灰褐色 | 貼付け高台で「ハ」の字状に開きが見られる | 底部右回転糸切り痕あり | ナデ調整されている様である | 一部黒斑有り | |
| 3 | W-5 | 軒平瓦 | | | | 黒色鉱物粒を含む 酸化 | 褐　色 | 三枚の粘土重ねが見られ、肉厚である 中央2.5cm　端　1.7cm | 凸面は布目で凹面は素文 | 内区文様は唐草文 二重界線 | | 5 |

g　6号溝（W－6）

6号溝は調査区域の南側に位置し規模的には、2号溝と同程度のものと思われ、2号溝とT字形に合流する。上幅4～4.1m、下幅0.8m、深さ0.9mを測り断面形は緩やかなU字形を呈し立ち上がりは10°前後で立ち上がる。また、溝内西側底部に幅30cm、深さ4～6cm、長さ2.4mを測る溝状の遺構を確認したが、溝と呼ぶには、疑問が残る。溝底は砂礫質で固く締まっており2号溝とは同レベルでつながっている。高低差に関しては、南から北にかけて傾斜しているが調査範囲が狭いため、今後の調査に期待したい。出土遺物は須恵器、土師器片9点が出土したが覆土中のもので流れ込みによる物と思われる。



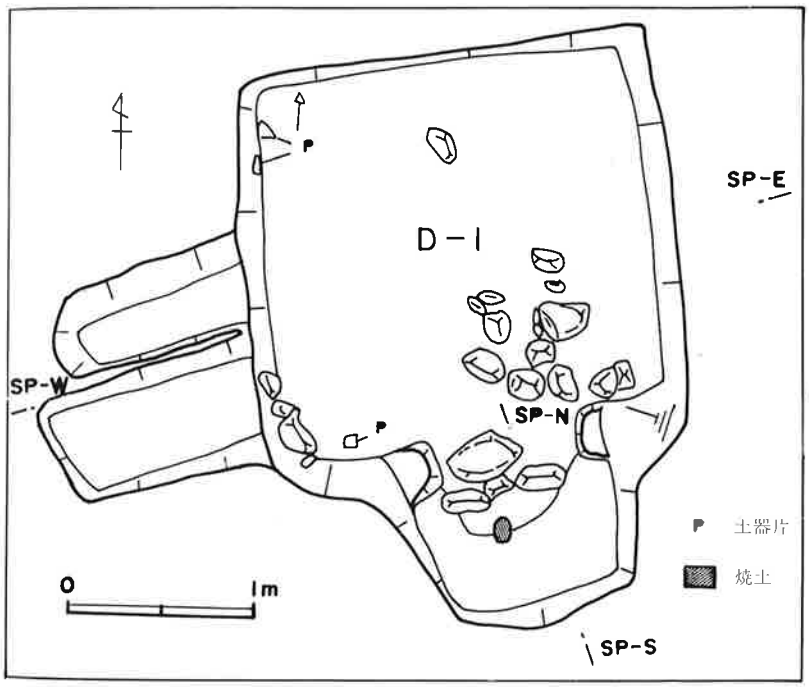

0　1m

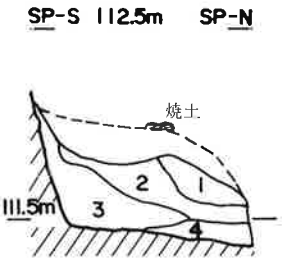
1　褐色土層　W-2の1層注記と同じ。
2　暗褐色土層　W-2の2層注記と同じ。
3　暗褐色土層　W-2の3層注記と同じ。
4　黒色土層　W-2　の4層注記と同じ。
5　暗褐色土層　土質は良く締まっており、粘性はあるが少しザラつきがある。
6　黄褐色土層　粘性があり、指に付着する。ロームが混じっているせいか全体的に黄味がかっている。締まりもよい。

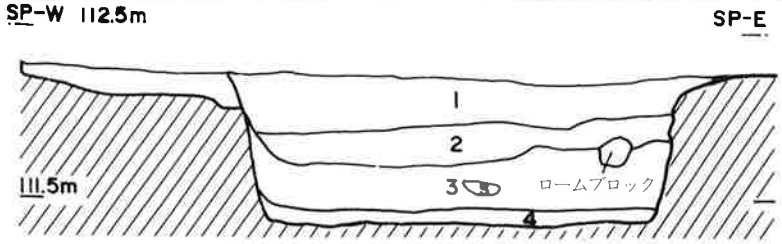
第13図　6号溝平面図・土層断面図

## 2．地下式土壙（D－1）

本遺跡は、調査区東よりD－4グリットにかけて位置し、すぐ北には3号溝が走っている。入口部から地下室部にかけて人頭大ほどの自然石が流れ込んでおり、入口部は石によって塞がれていたと思われる。また、石の間に粘土状ブロックがあり、入口を塞いだ後、粘土で目張りした様だが、粘土ブロックの検出状態から見て断定するには疑問が残る。本土壙は地山を掘り込んだ土壙であり平面プランは210cm（南北）×210cm（東西）の正方形を呈し、入口部は南にあり、当初円形だと思われていたが60cm（南北）×90cm（東西）の長方形プランであった。天井部の残存は本遺跡では確認できなかったが、側壁は、入口部、地下室部とも、ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの入口部の深さ約62cmと地下室部約76～78cmで、地下室部がやや深くなっている。床面は平坦で固く締まっており、造りは大変良い。入口部と地下室部の境には、幅20～25cm、高さ25cm前後の門状の造り出しがあり、入口と地下室部をはっきりと分けていた様だ。また、入口部中央から造り出しにかけて底が緩やかにU字状にくぼみ、地下室部に傾斜していることから、地下室部への出入りがあったと思われる。出土遺物は、遺構に伴うものは、ほとんどなく、確認面上で、土師器片、須恵器片、灰釉、緑釉陶器片5点が検出された。



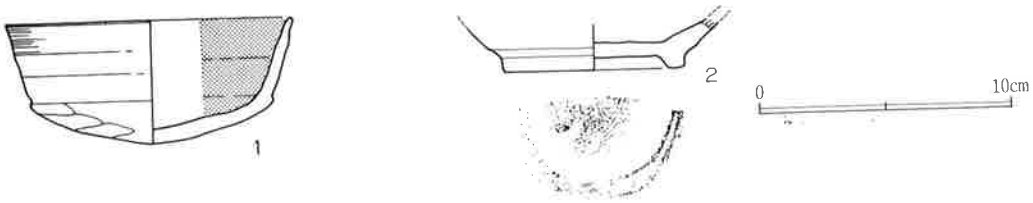




第14図　地下式土壙
平面図・土層断面図

1　明褐色土層
粘性はそれほどなく、締まりぐあいは普通で2～3mm程度の小石を含む。
2　暗褐色土層
粘性は1層よりも多少あり、シルト質のブロックが混入している。黒色土を所々に含んでいる。

3　暗褐色土層
2層よりは粘性はなく、軽石（B軽石）を比較的多く含んでいる。締まり方は比較的よい。
4　灰褐色土層
粘性がある。土質は締まっている。所々にロームのブロックが見られる。




第15図　地下式土壙出土遺物

第４表　地下土壙出土遺物観察表

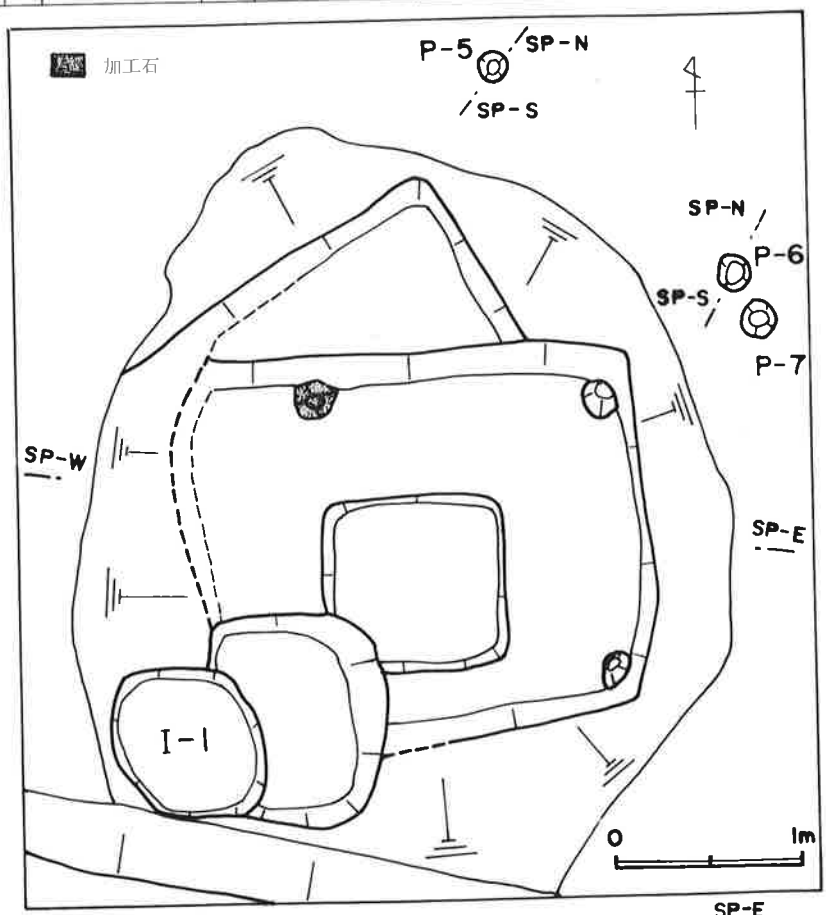
法量（　）は推定値

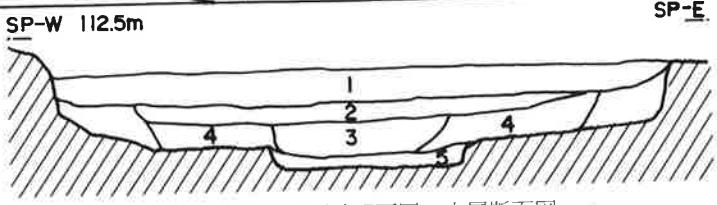
| 番号 | 出土位置 | 種類 | 法量(cm) 口径 | 底径 | 器高 | 胎土・焼成 | 色調 | 器形の特徴 | (外面)整形 | (内面)整形 | 遺存備考 | 図版No. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | D-1 | 杯<br>土師器 | | | 3.9 | 締まっている<br>やや軟　酸化 | 浅黄橙色 | 底部は偏平で口縁部は直線的に外反する | 底部ヘラ削り<br>口縁部ナデ調整 | 底部・口縁部ヘラ磨き調整　内黒 | ½残 | |
| 2 | D-1 | 杯<br>須恵器 | | (8.0) | | 締り有り　還元 | 灰白色 | 貼付け高台はしっかりしている | 底部右回転糸切り痕<br>回転ナデ調整 | 底部中央やや盛り上がる　回転ナデ調整 | ½残 | |

## 3．井戸跡

（Ⅰ－1）

井戸跡は調査区南、F－4グリット内に位置し、直径約75cmの円形で、深さは確認面から約2mを測る。形状は円筒形でほぼ垂直に掘り込まれており大変造りの良い形状である。また、井戸の縁には縦約1.15m、横約75cm、深さ約37cm程の長方形




1　褐色土層
粘性はあまりない。
2　褐色土層
粘性は少なく、ザラツイている。
3　暗褐色土層
ローム粒子が疎らに混入し粘性は少ない。
4　黄褐色土層
ローム粒子が多数にローム粒子が多量に混入。
5　ソフトローム層

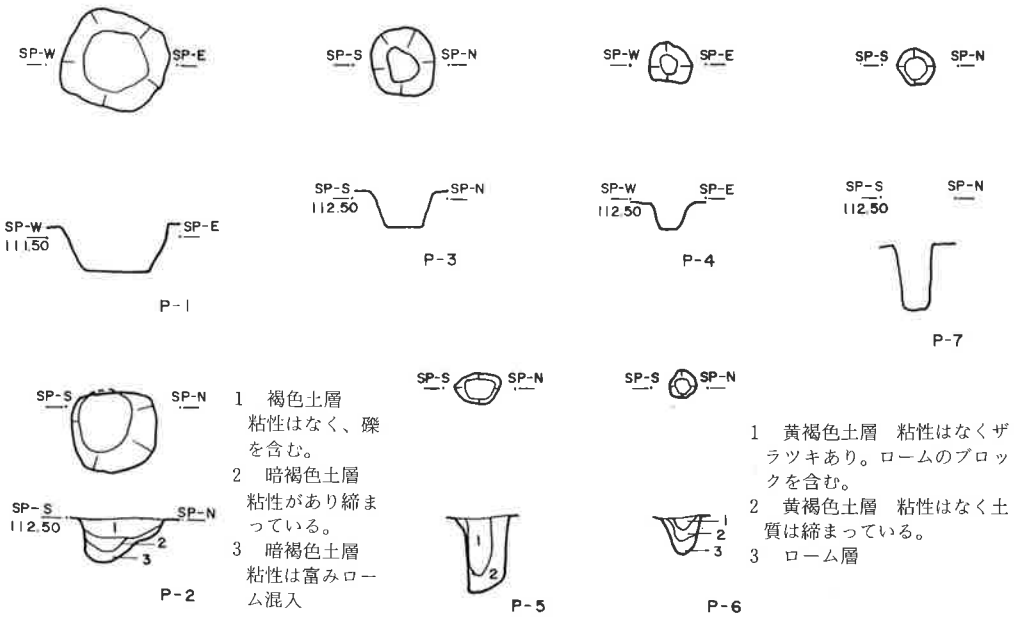
第16図　井戸跡平面図・土層断面図

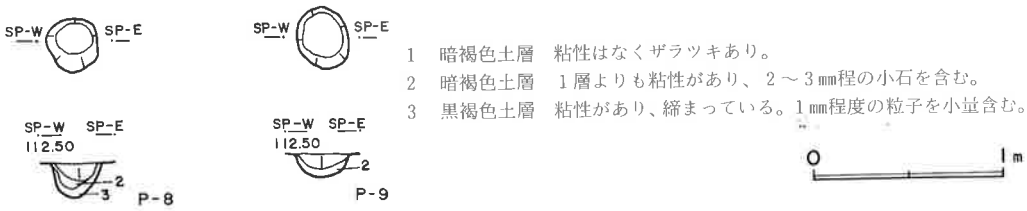
の落込みがあり、井戸との関連が考えられる。遺構中央にも、縦横90×90cm深さ約13cmを測る正方形の落込みが確認された。そして、北50cmの所には上面を平坦に加工した23cm程の角閃石安山岩の礎石が検出され、東1.5mの位置にも礎石の存在を示す、幅20cm程のピットがあり、その南にも同様のピットが検出された。この遺構はピット間1.5m×1.5m深さ16cm程を測る。正方形プランの遺構であり、礎石の存在から柱が立てられていたと思われる。また東壁上から焼土が確認されたが残存が小並で遺構に伴うものか判断しかねる。

## 4．ピット状遺構（P－1～9）

本遺跡では9ケ所のピットを検出した。以下P－1～9までを関連ごとに説明していく。

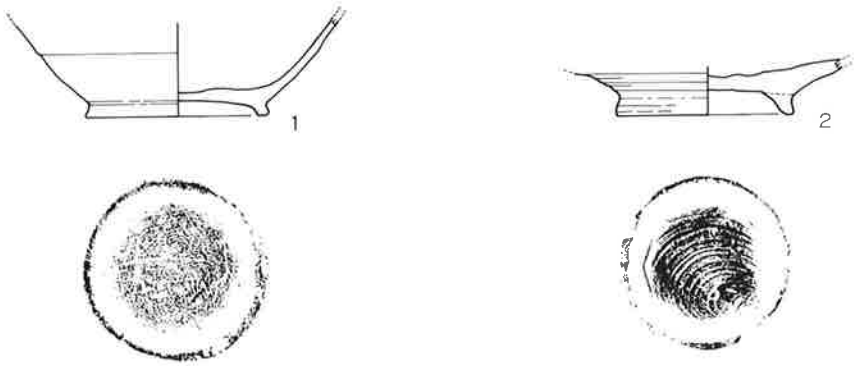
P－1は、2号溝が東に流路を変える、溝内に位置し、直径50～55cm、深さ43cm程を測る。円形でロート状に掘られたピットである。ピット内は拳大の角閃石安山岩16個程で埋まっていた。溝内で確認されたピットは、このピットだけであり2号溝と関連付けて考えるには資料にとぼしい。P－2～4は、6号溝の東側、E－3グリットとF－3グリットにかけて位置し。P－2、3は隣接する。これらのピットの規模は、直径25～40cm前後、深さ18～25cm程で、円形である。P－2から、須恵器の台付き椀と台付き皿の底部が出土し、P－4からは、土師器の杯と須恵器の皿がほぼ完形の形で出土した。当初、地鎮祭に伴うものかと思われたが、出土状況からみて流れ込みによる感が強いと思われる。P－5～7の規模は直径15～20cm、深さ20～40cm程で円形であり、円筒形とロート状に掘り込まれている。これらのピットは井戸と何か関係があると思われるが判断しかねる。P－8、9は調査区東、東壁よりに南北に位置し、直径30cm前後、深さ10cm程で円形である。建物の柱穴には、浅すぎる感がし、使途について未調査区域に注意したい。



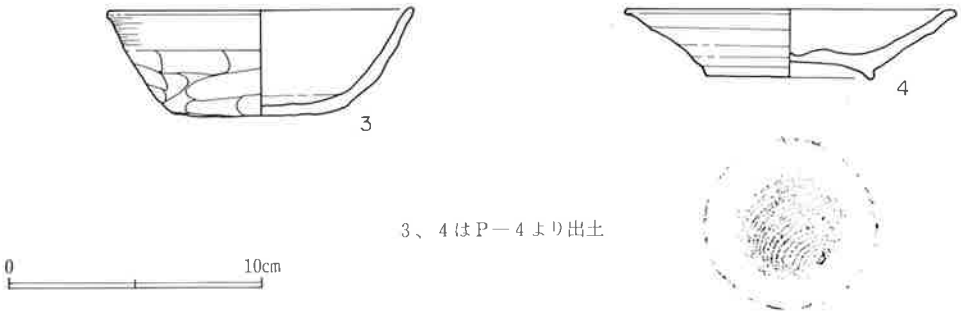



1　暗褐色土層　粘性はなくザラツキあり。
2　暗褐色土層　1層よりも粘性があり、2～3㎜程の小石を含む。
3　黒褐色土層　粘性があり、締まっている。1㎜程度の粒子を小量含む。

第17図　ピット状遺構平面図・土層断面図




1、2はP－2より出土




3、4はP－4より出土

第18図　ピット状遺構出土遺物

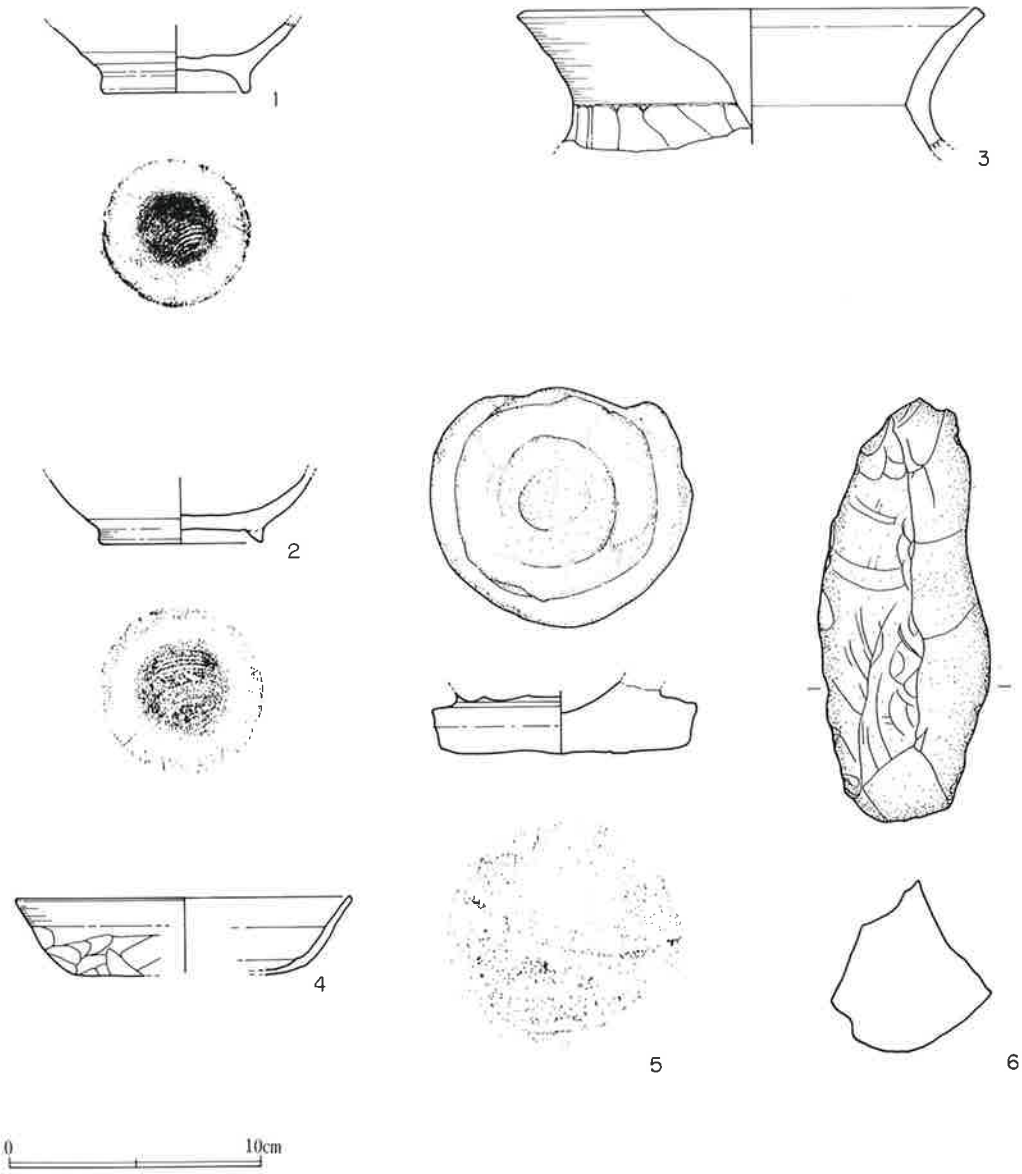
## 第5表　ピット状遺構出土遺物観察表

法量(　)は推定値

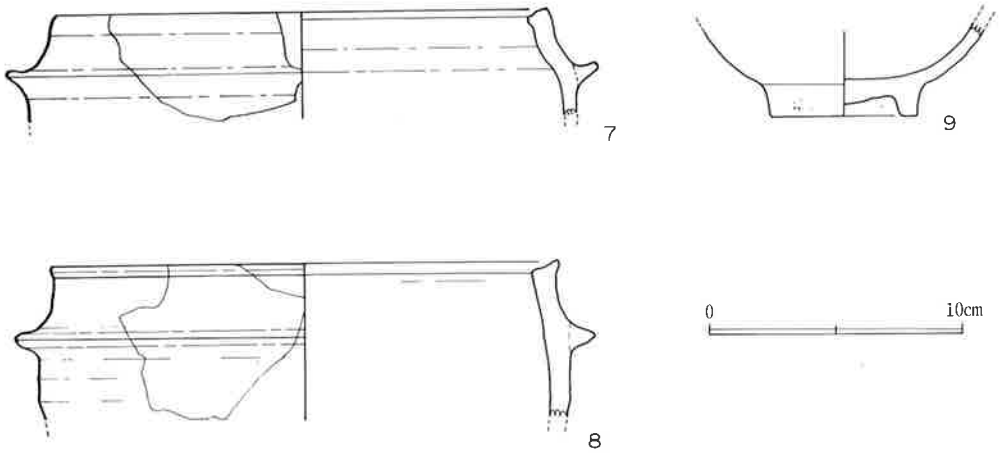
| 番号 | 出土位置 | 種類 | 法量(cm) 口径 | 底径 | 器高 | 胎土・焼成 | 色調 | 器形の特徴 | (外面)整形 | (内面)整形 | 遺存備考 | 図版No. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | E-3G P-2-1 | 台付埦 須恵器 | | (7.5) | | 1～2㎜礫 還元 | 浅黄橙色 | 底部から緩やかに外反する | 糸切り痕が見られる。ナデ調整の稜有り | 底部中央が窪みナデ調整 | 底部残 | 5 |
| 2 | E-3G P-2-2 | Ⅲ 須恵器 | | 7.3 | | 砂粒を含む 還元 | 灰白色 | 高台部は貼付け「ハ」の字に開きぎみである | 底部右回転糸きり痕 回転ナデ調整 | 底部右回り渦巻痕有り | 底部残 | 5 |
| 3 | E-3G P-4-1 | 杯 土師器 | 12.2 | 6.8 | 4.3 | 2～3㎜礫 酸化 | 明赤褐色 | 底部から緩やかに立ち上がり口唇部で外反する | 指整形後口縁部までナデ調整 | 口縁部から体部にかけてナデ調整 | 口縁部1/4欠 | 6 |
| 4 | E-3G P-4-2 | Ⅲ 須恵器 | 13.2 | 7.0 | 2.8 | 1～2㎜砂粒 還元 | 淡黄灰色 | 高台から直線的に外反 貼付け高台 | 指により回転整形とナデ調整 | 中央部に窪み有り 全体にナデ調整 | 口縁部1/4欠 | 6 |

## 5．その他

この項では、遺構と関係なく出土したもので実測出来る物は行い、出来ない物は一括として注記した。土師器片240点、須恵器片125点を数えたが磨滅しており器形に関しては判断しかねる。




第19図　その他出土遺物




## 第6表　その他出土遺物観察表

法量(　)は推定値

| 番号 | 出土位置 | 種類 | 法量(cm) 口径 | 底径 | 器高 | 胎土・焼成 | 色調 | 器形の特徴 | (外面)整形 | (内面)整形 | 遺存備考 | 図版No. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | E-2G | 台付埦<br>須恵器 | | (6.0) | | 砂粒を含む<br>還元 | 灰白色 | 貼付け高台で体部は直線的に外反する | 底部糸切り後ナデ調整 | 回転ナデ調整 | | |
| 2 | 包含層 | 台付埦<br>須恵器 | | 6.6 | | 1～2㎜の小石を含む<br>還元 | 灰白色 | 底部回転糸切り痕<br>貼付け高台 | 高台は貼付け後ナデ調整 | 渦巻痕あり<br>ナデ調整だが良くない | 底部残 | |
| 3 | 〃 | 甕<br>土師器 | (18.6) | | | 1～2㎜の砂粒を含み<br>酸化 | 浅黄橙色 | 胴部から口縁部は「く」字に外反口縁端部面取り有り | 口縁部ナデ調整<br>胴部ヘラ整形 | 口縁部ナデ調整 | 口縁部½残 | |
| 4 | E-3G | 杯<br>土師器 | (13.4) | | (3.3) | 砂粒を含み締まっている　酸化 | 橙　色 | 体部は開き気味に湾曲し口縁部外反する | 底部と体部指による整形<br>口縁部ナデ調整 | 体部から口縁部にかけてナデ調整 | | 6 |
| 5 | 包含層 | 鉢<br>須恵器 | | 9.5 | | 黒色鉱物粒含む<br>還元 | 灰　色 | 底部円形で厚さ1.5cm程<br>面取り有り　内面は凹 | 底部端回転ナデ調整 | 底部凹はきれいに磨かれている | 底部裏面2条の弧状痕 | 6 |
| 6 | 〃 | 石　器 | | | | 粘板岩 | | | | | | |
| 7 | 〃 | 羽　釜<br>須恵器 | (19.4) | | | 砂粒と鉱物粒を含む<br>還元 | 灰白色 | 口縁部は内傾し口唇部は肥厚し鍔は貼付け | ナデ調整 | ナデ調整 | | 6 |
| 8 | 〃 | 羽　釜<br>須恵器 | (20.1) | | | 夾雑物を含まず締まっている　還元 | 明青灰色 | 口縁部は直立化が目立ち口唇部は肥厚し鍔は貼付け | ナデ調整 | ナデ調整 | | 6 |
| 9 | 〃 | 天目茶埦 | | 6.0 | | 焼成・胎土は良好<br>還元 | 黒褐色 | | | | 底部残 | |

# 第6章　ま　と　め

今回の発掘調査により、溝6条、地下式土壙1基、井戸跡1基、井戸に伴う遺構1基、ピット状遺構9基が確認調査された。その詳細については前章で述べたとおりである。

本遺跡においては、その明確な時代決定を下せる資料が少ないため断片的な危惧をまぬがれない。溝においては、2号溝（N－64°－E）を中心に3号溝（N－81°－E）、5号溝（ほぼ南北）、6号溝（N－18°－W）と枝分かれし走行する。また、B軽石は溝が埋没後降下したと思われるが、東方向に行くに従い層としては確認できなくなっていく。本遺跡の西約20m付近に国府の外郭ラインと考えられている幅約7mの大溝[1]が南北に走っている可能性があり、2号溝との関連が興味深い[2]。地下式土壙については、時期や性格を知る資料等を欠いているため推測の域を脱しえないが、類例として清里南部遺跡群[3]・国分境遺跡[4]等で報告されており、中世墳墓の「やぐら」や墓壙と考えられる土倉と似た構造を持つことは注目される。本土壙は構造的には方形に造られており、尺度による企画があったと思われる。地下室部・入口部ともに唐尺の1尺に当る30cmで換算出来るため興味深い。（地下室部7尺×7尺・入口部2尺×3尺）唐尺は仏教建築技術と共に導入され、律令制（大宝律令）以後に使用されたと言われており[5]、県内においても、終末期古墳の石室築造にも使用されている[6]ことから、使用された可能性はあるが断定は出来ない。また、上記のことから、本土壙は墓壙と考えたほうが妥当ではないかと思われる。井戸跡と礎石を伴う遺構との関連については、資料がなく今後の調査研究に期待したい。しかし、礎石を伴う遺構においては、糸井宮前遺跡[7]Ⅰの32号住居址に類例がみられる。平安期の住居で礎石は柱穴上におかれており、表面は分割を試みた加工痕が存在し石材は硬質の輝石安山岩質であり古代石材加工を考える上で興味深いとし、基礎構造の移行（地下式柱穴から地上式礎石）を指摘している。本遺構は住居址としてはとらえにくいが、基礎構造の移行においては一致すると思われる。また、加工石材においては、角閃石安山岩が使用されており柱を乗せた面は平坦に彫り込まれ、柱がずれないように加工されている。そして、土中に埋まる部分はふっくらと丸味を持ち荷重の分散が考えられているようだ。糸井宮前遺跡Ⅰと同様に、石材加工技術や加工専門職人との関係を考える上でも本資料の重要性がうかがえる。出土遺物については、表土と確認面の間で出土したものが大半を占めているため遺物の時期と遺構とは必ずしも一致しないが、それを踏まえた上で時期を考えてみたい[8]。挿図7－1の椀は、酸化焔焼成で器肉が厚くぼってりつくられており清里・陣場遺跡の第4期類に相当すると思われる。挿図11－1、灰釉陶器皿は5号溝底より出土し、底部糸切痕は消され高台は太く全体に丸く整形しており第5期類に比定できよう。挿図18－1、2、3、4はP－2とP－4より出土した。1の椀は、酸化焔焼成で器高は低く口径が大きく、立ち上がりは丸味をもつ、2は高台付き皿で酸化焔焼成で糸切り後、雑に高台を貼り付けている。第4期類～第5期類に相当すると思われる。3は土師器の坏で指頭圧痕による整形後ナデ調整が見られ底部は平底である。4は高台付き皿

で酸化焔焼成で糸切り後貼り付け高台としている。第3期類～第4期類に考えたいが判断しかねる。挿図19―1の埦は、酸化焔焼成で高台内面は糸切り後、ナデ消し再調整している。第4期類の土師質土器A類に類似していると思われる。以上のことと、他の出土遺物から見て本遺跡では第3期類～第5期類（9世紀後半～11世紀前半）にかけての遺物が出土している。挿図19―5については、当初判断しかねたが、器形的には、すり鉢又は、鉢の底部に類似しており胎土的には黒色鉱物粒の混入と夾雑物の少ない点から秋間古窯跡の物と似かよっている。使途においては、底部に二条の弧状痕があることから土器の焼き台として使用した可能性もあり、県内からの出土例は少なく唯一鳥羽遺跡から類似した底部が出土している。時期的には類例も少なく推定でしかないが陶邑Ⅰ[9]の編年と鳥羽遺跡出土例から考えて7世紀～8世紀初頭頃が妥当ではないかと思われる[10]。以上、断片的になってしまったが、本遺跡の調査が今後の調査・研究の一資料となれば幸いかと存じます。

〈注〉

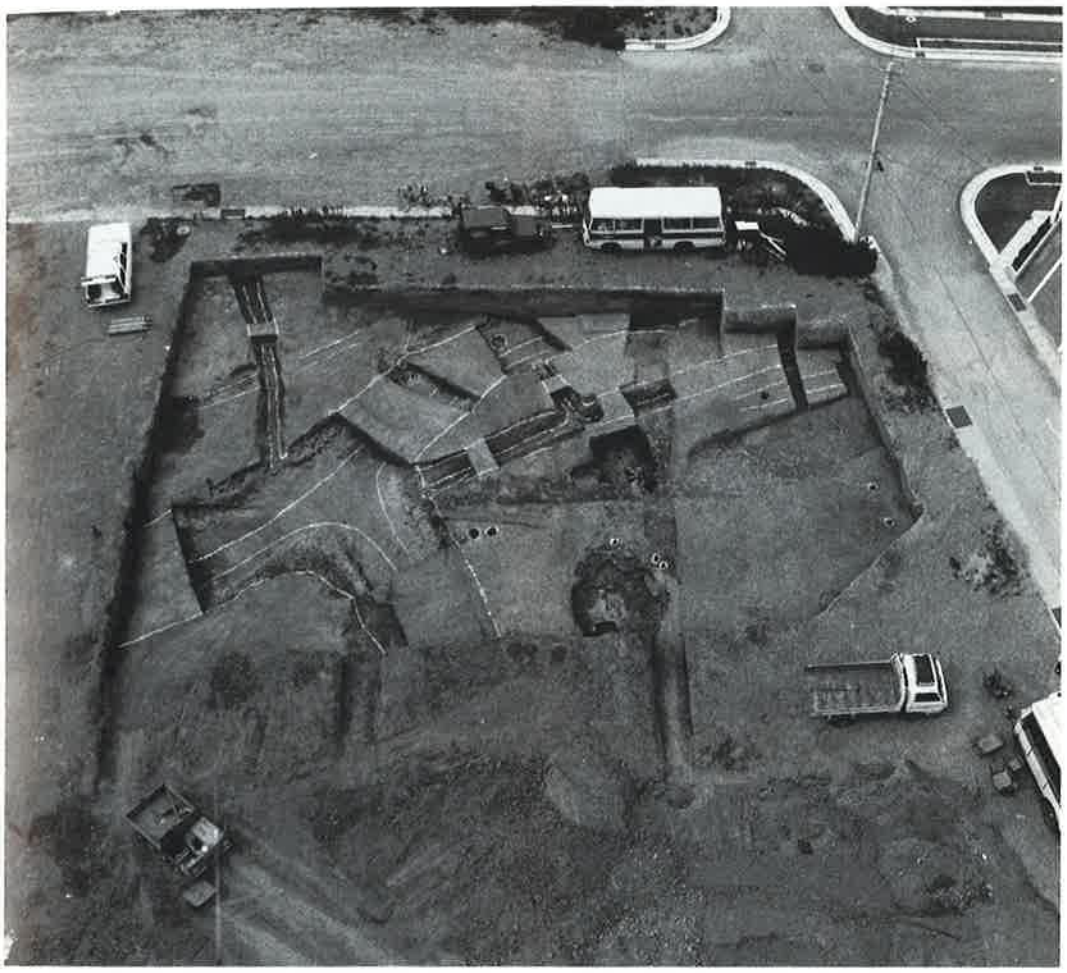
1　「元総社明神遺跡Ⅲ―Ⅳ」（1986）前橋教育委員会
2　元総社明神遺跡B地点の大溝と2号溝との底のレベルが111.50m前後で同レベルの可能性があると思われる。
3　「富田遺跡群・西大室遺跡・清里南部遺跡群」（1980）前橋文化財研究会
4　「国分境遺跡」（1982）（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　年報1
5　「図解　考古学辞典」（1982）水野清一・小林行雄　編　東京創元社
6　「横穴式古墳の研究」（1966）尾崎喜左雄　吉川弘文館
7　「糸井宮前遺跡Ⅰ」（1985）（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
8　「清里・陣場遺跡」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　時期の考察については清里・陣場遺跡の編年に準拠した。
9　「陶邑古窯址群Ⅰ」（1966）平安学園考古学クラブ。
10　この所見は、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　調査研究員の綿貫氏の御教示による。

しか
第4
本遺
構図
ょり
使
り、
も
妥
研

れ

製

# 図　　版



遺　跡　全　景（南上空より）

W－5（北より）

W－2、W－3、W－5、W－6（南より）

図版　2

W-2、W-3、連結構（北より）

W-2連結溝とP-1（北より）

W-5灰釉陶器出土状況

W-5馬歯出土状況

地下式土壙石流れ込み（北より）

地下式土壙（北より）

地下式土壙入口部セクション

井戸跡（南より）

礎石を伴う遺構（西より）

礎石の加工痕

P-１石出土状況（南より）

P-１（南より）

P-２土器出土状況

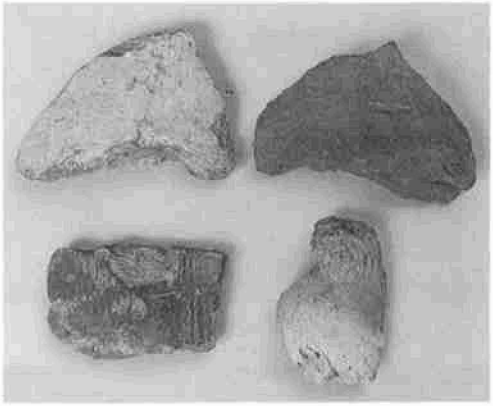
P-４土器出土状況

西壁Ｂ軽石堆積状況

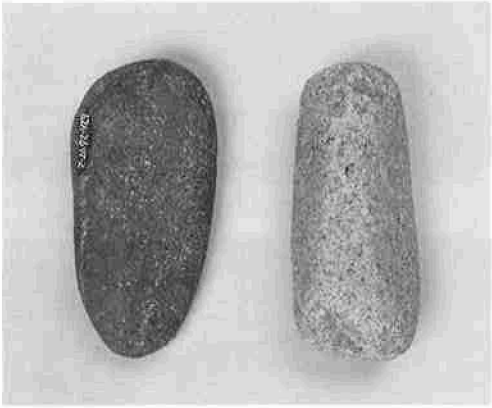
北壁セクション

図版　4

W－2（No.1）

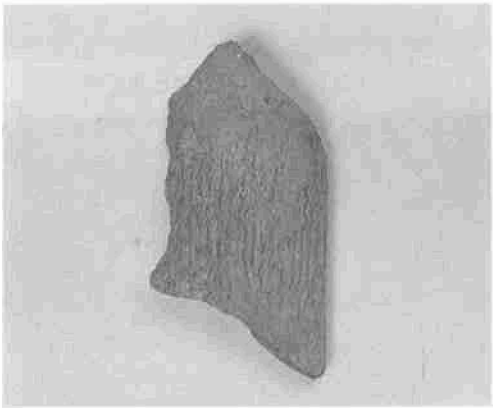


W－2（No.2、No.3、No.4、No.7）

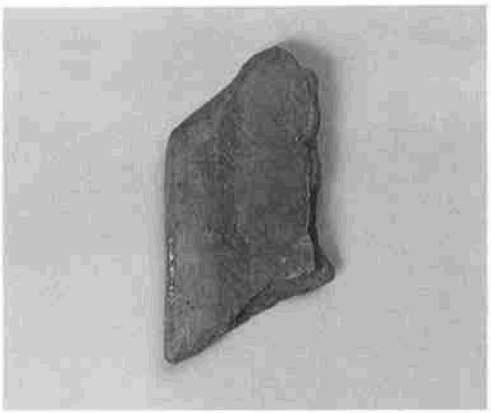


W－2（No.5、No.6）

W－3（No.1）



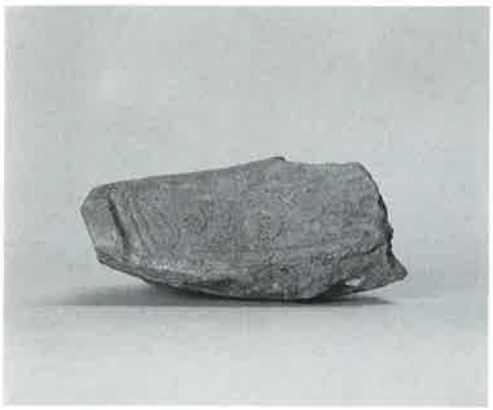
W－3（No.2表）



W－3（No.2裏）

W－3（No.3、No.4）

W－5（No.1）



W－5（No.3唐草文様）

W－5（No.3上面）

ピット状遺構（No.1、P－2より出土）

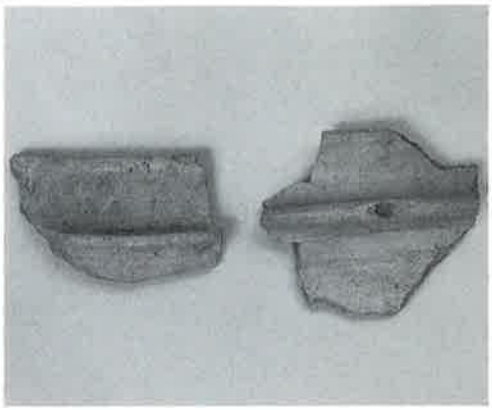
ピット状遺構（No.2、P－2より出土）

図版　6

ピット状遺構（No.3、P-4より出土）

ピット状遺構（No.4、P-4より出土）

その他（No.4）



その他（No.7、No.8）

その他（No.5鉢底部）

その他（No.5鉢底部内側）

前橋市教育委員会
24.11.22
第　号
受付

前橋市三俣町二丁目10－2
前橋市教育委員会文化財保護課

大友屋敷II遺跡

昭和63年1月20日　印刷
昭和63年1月25日　発行

編集　スナガ環境測設㈱
発行　前橋市教育委員会
前橋市埋蔵文化財発掘調査団
印刷　朝日印刷工業株式会社